

大正七年（一九一七）の四月。うらかな午後。

ニューヨーク州、シャンデーケンの山荘。その居間。

自然石を嵌め込んだ暖炉。形の不揃いな安楽椅子や小テーブル。ライティングデスクなど。小テーブルの上には折り畳みの将棋盤が置かれている。

どこかに階段の一部が見えて、それは階上の寝室へと続くつもり。

居間の窓は開け放たれて部屋には風が渡っている風情。鳥の鳴き声など聞こえる。

野口と友人の堀市郎（四〇）が釣竿とバケツを提げて入ってくる。

堀

しかしいい所を見つけたな。ニューヨークの喧騒などまるで遠い世界の出来事のような。浩然の気を養うにはまさに格好の場所じゃないか。

野口

山があつて川があつて魚が釣れる。言うことなしさ。何より風景がいい。どことなく猪苗代に似てるんだ。

堀

なるほど。アメリカに居ながら里帰りも味わえるという寸法だね。

野口

もつともメイジーはもつと海の近くが良かったと不平を言つとるがね。

野口、階上に声を掛ける。

野口

メイジー？ メイジー？ 鱒が釣れたぞ。今夜はこいつをフライにして一杯やろう。

階上から「好きにすれば？」という不機嫌な返答が降ってくる。

堀

何だい、奥方はご機嫌斜めかい？

野口

ああ。さつき釣りに行く前にちいっと喧嘩をしてな^レイ。どうもアイリスという奴はいっぺんヘソを曲げると強情で始末に負えんよ。

野口、キッチンと思しき方角へバケツを置きに退場。

堀
フフ、新婚の頃はよく取っ組み合いの喧嘩をしとったからなあ。ボクの部屋にまでよう聞こえとった。

野口、出てくる。

野口
まったく。亭主に手をあげるなど日本の女なら考えられんよ。きみも細君を娶る時はきっと日本人にしたまえ。国際結婚という奴はなかなかどうして上手くゆかんよ。

堀
そうかね。あんたとメイジーを見てると満更でもないように思えるのだがね。

野口
そりやどういう意味だ。破れ鍋に綴じ蓋ということかい。

堀
フフ、まあそんなところだ。変わり者同士存外似合いの夫婦だよ。

野口
他人事だと思いやがって。

堀
ハハハ。

野口
おい、帰る前に一番どうだ。

堀
ヨシ、お相手仕ろう。ただし勝っても負けても一番だけだぜ。暗くなる前にニューヨークに着きたいからな。

二人は将棋盤の上に駒を並べ始める。

野口
明日は誰か大物の撮影でもあるのか。

堀
うん、早川雪洲さ。

野口
え、早川って、あのムーヴィースターのか？

堀
早川さん、今度はこっちで舞台に出るんだ。そのポスター用さ。

野口
凄いでねーか。そういえば誰かが話しておったが、近頃ブロードウェイじゃきみにポスターやブロマイド^を撮ってもらわねば俳優も一流とは呼ばれんそうだな。

堀
まさか、それほどでもないがね。まあわざわざボクを指名してくれるアクターやダンサーも幾人かいるのさ。

野口
大したもんだな^レ。

堀
何を言ってる。そういうあんたは今や世界の医学界の大スターじゃないか。近いうちにまた野口さんのも撮ろう。大分体重も戻って壮健に

なつたろう。快気の記念だ。

野口

ああ是非お願いしよう。

二人は将棋を指し始める。かなりの早指しである。

堀

ところでメイジ―は何を怒ってるんだい？

野口

なに、オレたちも明日帰ることにしたのだ。それでふくれとるのさ。

堀

明日？ だってここへは一昨日来たばかりだろう。

野口

うん、そうなのだがね。

堀

仕事に気がなるのかい？

野口

うむ……きみ、黄熱病のことは知っておるか？

堀

黄熱病……ああイエローフィーバーのことか。何でも蚊に刺されると高熱と黄疸が出てアツと云う間に死にまうとかいう怖い病気だろう？ パナマの辺りでは今でもずいぶん猖獗しとるらしいな。……え、まさか次はそいつをやるのかい？

野口

財団の国際保健局からの要請で黄熱病委員会の派遣団がエクアドルに調査に行くことになった。そいつに研究所からも細菌学者を一人出せ

と言つてきとるらしい。

堀

しかし、それならまだあんたが行くと決まったわけでもあるまい。

野口

行くとなればオレだよ。他に誰がいる。

堀

期間は？

野口

三、四か月といったところだろう。

堀

そりゃあ無茶だ。あんたはまだ病み上がりじゃないか。あんなに衰弱して生死の境を彷徨ったのもつい去年のことだぞ。そんな体で気候の苛烈な熱帯地方へ長期出張などもつての外だよ。

野口

自分のことばかりは言っちゃおられんさ。黄熱病の撲滅はこの国の喫緊の課題だからな。

堀

ボクは感心せんなあ。あんたはまず十分に養生をすべきだ。誰か他の人間にお鉢を回すわけにはゆかんのかね。

野口

それは無理だ。それに黄熱病なら相手にとって不足はない。是非やってみたいのだ。

堀

……野口さん、ボクは正直反対だよ。

野口

……そうか。ではこの話はもうよそう。

二人、しばし無言で指す。

メリーが降りてくる。

メリー

(冷たく) どうしてあなたたちはそのゲームがそんなに好きなの？
昨夜から百回もやったでしょう。

野口

正確には四十一回だ。対戦成績は二十一対二十でオレの勝ちさ。

堀

理由は簡単でしてね。あなたの御亭主は勝つまで寝かせてくれないからです。

メリー

馬鹿みたい。ミスター・ホリ、珈琲飲む？

堀

ありがとう。では砂糖は二つで。

メリー

オーケー。

野口

オレのはうんと甘くしてくれ。

メリー

あなたに淹れるとは言つてないわ。

野口

一杯も二杯も同じだろう。

メリー

欲しければ自分でどうぞ。

野口

わかった。なら要らないよ。

堀

ねえ奥さん、わたしもあなたに賛成ですよ。いくら何でも明日ここを

メリー

いい人ね。砂糖三つにしてあげるわ。

野口

メイジ、これは仕事なんだよ。仕方ないだろう。

メリー

フ、仕事が聞いて呆れるわ。本心は浮気相手に会いたいのくせに。

野口

いい加減にしないか。彼女はそんなじゃない。何度も説明したろ？

堀

ちよつと待った。聞き捨てならんな。それはどういう話です？

メリー

ヒデには若い愛人がいるのよ。

堀

まさか。

メリー

日本語で訊いてみれば？ 正直に白状するかもよ。

堀

本当に浮気してるのか？

野口

馬鹿々々しい。

堀

日本語なら彼女にはわからない。隠せというなら隠す。正直に言えよ。

野口

彼女はただの秘書だ。浮気なんてするわけねーべ。

堀

ただのセクレタリーだと言ってますよ？

メリー

ただのセクレタリーがどうして夜中の二時まで研究室にいるの？ し

かも二人きりで。これが浮気でなかったらあたしの眼はよっぽど節穴ね。

野口

彼女は論文の清書をしてくれてただけだよ。翌朝が『ジャーナル・オブ・エクスペリメンタル・メデイシン』の締め切りだったからだ。彼女が遅くなったのはその晩くらいさ。

メリー

嘘よ。彼女はたいてい遅くまであなたの研究室に残っているわ、毎晩二人きりで。ちゃんと知ってるのよ、守衛のバーニーが全部教えてくれたもの。それに我が家のリビングで彼女からの電話に出るあなたのしゃべり方って最低！」「(甘い声で)やあエブリン、どうした？ 何かあったかい？」……あの声を聞いて「ああ、仕事熱心な夫に優秀な秘書がいてくれて嬉しいわ」って神様に感謝する女房がこの世にいると思う？ 百万ドル賭けたっていいわ、ただの一人もいないから！ 神様は決してそんな女をこの地上にはお創りにならなかったからよ！

野口

メイジー頼むから興奮するな。

メリー

これが興奮せずにいられると思うの？ よくも言えたもんだわ。「メイジーすまないがオレは明日ニューヨークに帰るよ。残りたければきみは残ったらい。オレは独りでも大丈夫だから」……何て言い草？

明日がどんな日かすっかり忘れてるんでしょ？

野口

明日がどんな日かって？ ちゃんと覚えてるさ。

メリー

なら何の日？

野口

オレたちの、つまり結婚記念日さ。

メリー

何回目なの？

野口

六回目、いや七回かな……そう七回目のだ。

メリー

ほらごらんない。あたしに言われて今慌てて思い出したんじゃないの。

野口

そうじゃない。結婚記念日だってことはちゃんと覚えてたさ。

メリー

もういいわ、嘘はもうたくさん！

堀

まあまあ奥さん、ここは一つわたしに任せて。こういう問題には第三者の公正な判断が必要です。二人の間に立ってここはこのわたしが判事の役を務めましょう。(野口に)オホン、では開廷するぞ。まずは浮気の話だが、そいつは本当に奥さんの思い過ごしなんだね？

野口

当たり前じゃないか。確かにエブリンはオレに多少の好意は抱いてくれているかも知れん。だがそれは細菌学者としての単なる師弟関係だよ。それ以上でも以下でもない。オレはただ彼女が有能だから仕事を手伝

つてもらっているだけだ。

堀
ボクに誓えるか？

野口
無論だ。すべて誓って本当のことだ。

堀
オーケー。というわけで奥さん、この件では彼は無実の様です。

メリー
あたしが信じると思う？ あなたは彼の友達だわ。

堀
同時にあなたの友人でもあるつもりでしたが。よろしい。もし彼の言ったことが真実でなかった時は、わたしはあなたの前でハラキリをしましょう。

メリー
ハ？ 今何て言ったの？ ハラキリ？

野口
おいキミ。

堀
わたしの家は元サムライです。日本のサムライはそのような場合は己を恥じて自らの剣で自らを殺すのです、この様に。（と切腹の仕草）

メリー
（驚く）クレイジー！

堀
無論わたしが死ねば彼もまた生きてはおりません。ノグチもまたハラキリをします。ねえキミ、そうだろう？

メリー
（野口に） そうなの？

野口
え？ あ、当たり前だ。オレだって会津のサムライだ。

彼女は手を広げて天を仰ぐ。

堀
そして次に休暇を切り上げてニューヨークに戻る件ですが。（野口に）キミ、エクアドル派遣はまだ正式に決まったわけではないのだから？ ならばせめてあと一週間はここで養生をしたまえ。今は少しでもその体と神経を回復させる時だ。ボクは医学に関しちやずぶの素人だが、ここは是非ともボクの忠告に従ってもらいたいね。

野口
そうはいかん。研究の下準備や現地での実験室の手配、いざ出かけるとなれば今すぐ取り掛からなくちゃならんことは山ほどあるんだ。

堀
野口さん、この際だからはっきり言おう。……ボクはね、去年マウン・トサイナイ病院にあんたを見舞った時のことが忘れられんだ。げつそりと痩せて土気色したあんたの顔を見た瞬間、ボクは心底ゾツとしたんだよ。正直もう助からんだろうと思った。あんたの前で不覚の涙を堪えることがいかに辛かったか。……友人としてあんな思いをするのはもう二度と御免だ。その気持ちは奥さんだっけとずっと同じはずだよ。

野口
……。

堀 それでも不承知だというのなら仕方ない。ここは一つ恨みつこなしの勝負と行こうじゃないか。

野口 勝負？

堀 この指しかけの一番で決めよう。それでどうだい？

野口 よし、いいだろう。望むところだ。

堀 ではきみの番からだ。

野口 よし、では行くぞ。うむ……かくなり果つる上からは……これでどうだ。

野口、ピシリと一手打つ。

メリー やめてちょうだい、そんなゲームでふざけ半分に決めないで。

堀 大丈夫ですよ奥さん。わたしが負けたら彼はここに残る。わたしが勝ったら彼はニューヨークに帰る。

野口 え？ ちよつと待て。それじゃあべこべじゃないか。

堀 いいや、これでこそフェアなのさ。きみは常に勝つまで絶対にやめんのだから。というわけでボクはこれにて投了だ。負けました。（と頭

を下げる）

野口 おいキミ、そんなの卑怯だぞ。

堀 というわけで奥さん、彼は絶対に浮気もしておらんし、ニューヨークにも帰らない。よって原告と被告は笑顔で和解すること。これが当法廷の判決です。以上。（木槌を打つ仕草）これにて閉廷いたします。

三文芝居に喰われてポカンとする野口とメリー。

メリー フフ……信じられないわ。

堀 彼ではなくこのホリをお信じなさい。それですべての問題は解決。そしてホリ判事はあなたの美味しい珈琲を是非にと所望いたしております。

メリー、さすがに笑いだす。

野口も苦笑する。

野口 メイジー、そういうわけで帰るのは取り止めだ。だからオレにも珈琲

を淹れてくれ。

メリー

いいわ。でも砂糖はなしよ。

野口

なぜだ？ 疑いは晴れたろう？

メリー

完全に信じたわけじゃないから。

メリー、キッチンへ去る。

堀

どうだ、ボクもなかなかの名奉行だろう。

野口

冗談じゃない。きみは芸術家よりもペテン師^にさずくと向いとる。

堀

ハハハ。

野口

まあいい。ならこれでオレの二十二勝だからな。

野口、傍らのノートを開いて几帳面に勝敗を記す。

堀

あんたたちも新婚の頃に子供を作っておけばよかったのだよ。そうすれば彼女もきみの浮気なんぞに構ってる暇はなかったろうに。

野口

くどいぞ。浮気なんぞしておらん。

堀

そういえば前にメイジーにも聞いたことがあるな。その時は自分たちは変わり者の夫婦だから子供なんていない方がいいのだと言ってたが。やつぱり彼女が望まなかったのかい？

野口

……。

堀

すまない。立ち入ったことを聞く気はないんだが。

野口

いいさ。……メイジーは欲しがってた。オレが望まなかったのだ。

堀

そうか。

野口

オレの血はスピロヘータに感染しておるからな。

堀

え……？

野口

まあそういうことだ。

堀

実験中に……ということかい？

野口

メイジーはそう信じてる。

堀

……そうか。

野口

真実を話すこともなからう。

堀

そうだな。

野口

若い頃から散々馬鹿をやった報いだ。仕方ない。

堀

うむ。

野口 家内には気の毒だが。

堀 ……なあ野口さん。あんたはさつき黄熱病なら相手にとって不足はない。自分でも是非やってみたいのだと言ったね。

野口 ああ。細菌学者なら誰でもそう考えるだろう。当たればでかいからな
イ。

堀 当たる？

野口 研究というのは投機や賭けのようなものだよ。同じ苦勞なら思い切つて大物にぶつからなくちゃつまらん。北里先生の破傷風菌の発見などいい例だ。あれは大物が当たったわけさ。だから北里さんは師匠の緒方先生などよりずっと有名になった。

堀 ふーん。そういうもんか。

野口 そういうもんなんだ。

堀 でも、あんただって恩賜賞まで賜つてじゅうぶんに功成り名を遂げたじゃないか。

野口 いや、世界ではまだまだだ。まあ見ていたまえ。黄熱病^を征服できたら今度こそノーベル賞間違いないだから。

堀 そうか。ならば成功を祈っているよ。

野口 ありがとう。

堀 ただな野口さん、これは気を悪くせずに聞いてもらいたいんだが……そんな話を聞くとボクは何だか得体のしれぬ危うさのようなものを感じてしまうのだよ。

野口 危うさとは何だ。

堀 うむ。何というか……あんた、まるでブレーキのない機関車に乗っている機関士のようなだ。機関車はぐんぐんスピードを上げながらどこまでも突っ走って行く。罐は真っ赤に焼けて今にも爆発寸前だ。それでもあんたはひたすらに石炭をくべ続ける。

野口 ……。

堀 すまない。水を差す気はないのだが。

野口 ……いや。それは言い得て妙かも知れんな。ロックフェラー医学研究所はアメリカの大金持ちが社会への申し訳に作った様な研究所だ。だから大衆の喜ぶ様な派手な成果を次々に上げ続けねばならん。初めからそういう宿命を負っている。まさにブレーキのない巨大な機関車見た様なものだ。そしてオレはきみの言う通りその罐にせつせと石炭をくべ続ける機関士さ。……だがもう今さら降りられんよ。

堀 野口さん……。

野口 フフ、きつともう一生停まれねーなイ……。

二人、黙った。

メリーが珈琲を運んでくる。

堀 ありがとう。うん、いい香りだ。

メリー あなたに見せたい物があるのよ。

堀 何です？

メリー ちょっと待ってて。

メリー、寝室へ退場する。

堀 何だろう。

野口 さあ。

二人が珈琲をすすっていると、メリーがキャンバスを片手に

戻ってきた。

それを見た野口、狼狽して彼女を止めようとする。

野口 メイジー待ってくれ。それはまだ習作なんだ。

メリー 駄目よ、ミスター・ホリに見てもらいましょ。見て、ヒデの絵よ。あ

なたから退院祝いに頂いた絵具で描いたの。ほら。(見せる)

堀 ほほう。これはまた。

あまり上手とはいえない風景画。

野口 (真っ赤になって) まだまだきみに見せられるような出来ではねえの

だ。もう少し上手くなってから見せようと思っていたのに。

メリー

ヒデったら可笑しいのよ。山荘の前の道の真ん中にイーゼルを突っ立

てて誰かが通りかかる度にこう言うの。「ご覧なさい。この木があそ

こに生えている木です。どうです？ そっくり同じでしょう？」……

堀 皆笑いを噛み殺すのに苦労してたわ。
ハハハ。しかしなかなかいい絵ですよ。掴んだ物をしっかりと表現出

来ている。初めて描いたにしちゃ大したもんだ。

野口

本当かね？ 専門家がそんなこと言うとは本気にするぞ。

堀

ああ。本気になって大いにやりたまえ。

野口

聞いたかメイジ。笑う奴の方が芸術を見る目がないのだ。

メリー、肩をすぼめる。

堀

そうだ。ではお返しにわたしも良い物をお見せしましょう。

堀、自分のトランクから小さな額に入った細密画を取り出した。

堀

どうです？ わたしの描いた室内装飾用の細密画です。

メリー

まあ。……素敵。何て綺麗なの。こんな小さな肖像を本当にお描きになったの？ どうやって？

堀

虫眼鏡と極めて細い筆を使って時間をかけて描くのです。このアドミラル・トウゴウの肖像は先月のナショナル・デザイン・アカデミーの

展覧会に入選した物ですよ。ニューヨークタイムスにもちよつとした

評が出ました。

メリー

素晴らしいわ。

堀

ではいつかこれと同じ様に奥さんも描いて差し上げましょう。

メリー

まあ本当？ きつとよ。約束よ。

堀

ええ、近いうちに必ず。ただし少々お値段が張りますよ？

メリー

大丈夫。ヒデが払うわ。

堀

それは結構。

堀、笑いながら額をトランクに戻す。

堀

それじゃわたしはそろそろ。またニューヨークで。

メリー

帰り道に気をつけてね。

野口

いろいろと忠告を感謝するよ。

堀

これからもどんどん絵を描きたまえ。神経が休まる。

野口

そうしよう。

堀、夫妻と握手を交わして出て行く。

野口とメリーも送りに出る。

やがてT型フォードが発進して遠ざかる音が聞こえ、二人は戻ってくる。

メリー 彼、いい人ね。

野口 うん。オレはどういうわけか友達には恵まれる。

メリー 鱒をフライにするのあなたも手伝って。

野口 ああ。……なあメイジー。

メリー 何？

野口 その、考えたんだが……きみ、もう一度舞台に挑戦する気はないかい？

メリー え？

野口 もう一度きちんとレッスン受けてさ、オーディションを受けてみたら？

メリー やめてよ。こんな歳になって今さら？

野口 でも、夢だったんだろ？

メリー ええ。そしてその夢はとくに終わったの。大勢の人たちからそこにおまえの居場所はないってはっきり告げられて外に放り出されたの。

あなたはアップ、あたしはアウト。人生ではよくあることよ。何とも思っていないわ。

野口 じゃあ例えば子供たちを集めて歌を教えるとか。きみ、歌が上手いじゃないか。

メリー いいのよ。あたし別に毎日が退屈なわけじゃないもの。急にどうしたの？

野口 いや……。

メリー 何よ、ちゃんと言って。

野口 うん……子供のこと、ずっとすまないと思ってるんだ。

間。

メリー もう忘れてたわ、そんなこと。

野口 ……そうか。

メリー さ、料理手伝って。

野口 うん。

二人がキッチンへ去ろうとすると、電話が鳴る。

野口 きみが出てくれ。オレは休暇療養中の身だ。

メリー、電話に出る。

メリー (電話に) ハロー?……ええ、おりますわ。ちよつとお待ちください。

野口 おい、オレは出ないったら。

メリー あなたの可愛いセクレタリー。

野口 え?

メリー 早く出てよ。このままあたしを悪者にする気?

野口、電話に出る。

野口 (電話に) ハロー? やあエブリン、どうした? (とつい軽い口調で

言ってしまい慌てて重々しい口調に切り替える) ……何かあったのか
ね?

メリー、首を振りながらキッチンへ退場。

野口 (電話に) え?……そうか。……うん……うん、わかった。それじゃ
月曜日に。

野口、沈鬱な顔で電話を切って、一度だけ深呼吸をする。
メリーを呼ぶ。

野口 メイジー、ちよつと来てくれ。

メリー、戻ってくる。

野口 所長から正式に辞令が下った。六月からエクアドルへ出張する。それ
について明後日の午後に黄熱病委員会のミーティングに出席しなけれ

ばならなくなった。……すまない。明日一日はゆつくりして、せめて
帰りは明後日の早朝にするよ。

メリー

……。

野口

本当にすまない。

メリー

(静かに) ……あなたが入院した時に気がついたの。あたしには何も
ないって。もう舞台への夢や情熱もない。子供もない。ミスター・
ホリの言った通りよ。もしこのままあなたがなくなったら……あた
しには本当にもう何もないんだって。そう思っ……ゾツとしたわ。

野口

メイジー……。

メリー

そのことだけ覚えておいて。

野口

……分かった。

メリー、うなずき、キッチンへ去ろうとする。

野口

あ、ちょっと待って。

野口、ライティングデスクの引き出しから小さな箱を取り出

す。

野口

一日早いけど、結婚記念日の贈り物だよ。

メリーが開けてみると、中から小さな額が出てくる。

それは堀が描いたメリーの細密画。

彼女は驚きで息を呑む。

野口

きみの肖像を描いてもらったんだ。実は堀君はこれをわざわざ届けに
来てくれたんだよ。

メリー

……二人とも人が悪いのね。

野口

メイジー、きみのさっきの言葉、一生忘れないと誓うよ。……オレは
決していなくなるらない。……大丈夫さ。ほら、結婚記念日だって忘れ
ちゃいなかったろう？

彼女は胸がつまって、何度かうなずくのが精一杯。

二人は静かに抱擁する。

音楽とともに……溶暗。

奥住、客席に向かい立つ……。

奥住

この二か月後の大正七年の六月、黄熱病流行の中心地エクアドルのグアヤキルに上陸した博士は、何とわずか九日目にしてその病原体を発見し、これを「レプトスピラ・イクテロイデス」と命名しました。まさに神業と思えぬこの快挙に世界の医学界は再び度肝を抜かれます。ロックフェラー財団によってただちに大量のワクチンが作られ、そのおかげで黄熱病の発生率は激減し、野口博士はまさにエクアドルを救った英雄として称えられたのであります。……ちょうどその頃、日本では博士の最愛のお母様が亡くなりました。野口さんは「死に目に会えぬのは覚悟の上だった」と申されて多くを語りませんでした。……そしてその後も、メキシコ、ペルー、ブラジルと中南米各地で黄熱病が発生する度に遠征に出かけられ、いずれの地に於いても多大な成果を上げ、熱烈なる歓迎を受けておられます。世界各国の大学から名誉学位が贈られ、フランス政府からは勲章を贈与され、ノーベル賞

の三度目の候補となられたのもこの頃です。……しかし、博士の発見した病原体にはやがて医学界から少しずつ疑問の声が上がり始めます。曰く……ドクター・ノグチは黄熱病と症状の酷似したワイル氏病の病原体「レプトスピラ・イクテロヘモラギエ」を黄熱病病原体だと誤認したのではないか？……そのような説が様々な場所で囁かれるようになります。事実、西アフリカに発生した黄熱病患者からはイクテロイデスは発見されず、野口ワクチンも効果がないという研究報告まで出されました。ここに至って、アフリカ黄熱病との戦いは、博士にとっていよいよ避け得ざるものとなったのであります。時に昭和二年の九月、博士が最初にエクアドルへ出かけてからちょうど十年の時が経っておりました。

奥住の姿が消える……。